

■プロローグ

別子山に秘めやかに咲く花と深い緑の木々が優しい歌を歌っている。そこに旅人がやって来て、活気付いていた往時の別子山を蘇らせる。

■第一幕・・・弘化4年～明治27年(1847年～1894年)

別子山で働く女たちが、庶民的に、日本のいい男ってどんな人？と問いかけながら物語は進む。別子山の昔からの生活の様子、切り上がり長兵衛による銅山の発見、広瀬幸平の指導力による繁栄、それらが次々と展開して行く。

一方伊庭貞剛は、22歳の時尊敬する勤皇の志士、西川吉輔の要請で動乱の京都へと旅立ち、明治維新以後は、官吏の世界で働く事となる。そして松と結婚するが、北海道での勤めに付いて行った松は、無理がたたり、はる子を残し早世してしまう。やがて後添えに梅子をもらい、伊庭は仕事へと邁進して行く。しかし天下・国家を考えて行動してきた正義感溢れる伊庭にとって、墮落した藩閥政治の官界はもはや自分が住むべき世界ではないと考え、きっぱりと止めてしまう。そして故郷に帰り、家族との束の間の団らんを楽しむ。

その頃、住友の発展のため優秀な人材を探していた広瀬は、伊庭を住友の本店支配人として誘う。伊庭は住友に勤めながら、日本初の衆院選で当選するも、政治の世界にも失望して、やはり止めてしまう。そして、煙害で大変な状況にある別子銅山に、単身向かうことを決意する。

■第二幕・・・明治27年～大正15年(1894年～1926年)

火中の栗を拾うが如く、荒れ果てた別子山にきた伊庭貞剛。自然が徹底的に破壊された別子山の嘆きの声を深く抱きとめながら、過酷な労働に苛立つ鉱夫たちとの危険な折衝にも、誠実に粘り強く向き合い、解決に導く。煙害を無くす為に、四阪島に製錬所を移転する決定を下し、山を緑に戻すため、年間百万本の植林をするなど、次々と実行してゆき五年後、ほぼ解決を見、大阪に帰って行く。

労使紛争の解決、煙害の克服、別子山の緑化など、全てを熟慮、祈念、放下、断行し、ついに解決に導けたことを、帰阪して誇らしげに報告する伊庭に、信頼する峩山和尚の「世の中まじめに観てな」の一声。やがて、自分の成功は、難しい事務作業に一生を捧げてくれている部下、別子銅山で働いている多くの鉱夫やその家族、そして大自然からの恩恵があって初めて出来たことなのだと気づき、峩山和尚に改めて感謝する伊庭。

別子山を緑に戻せたことを謙虚に感謝する伊庭に、「晩晴」を見出す。日本人の本来の心、清貧、陰徳、謙虚、素朴、無為自然、自然賛美、などにこそ世界へのメッセージがあると、死を前にした伊庭が静かに語る。

■エピローグ

別子山がもう一度静かに大きく浮かび上がる。自然こそが神だ、と旅人は語り、微笑みながら去ってゆく。最後には、別子山に生きるすべての命がもう一度元気に甦り、大自然に抱かれることの幸せが大合唱で歌いあげられて幕となる。



困難を極めた人生を誠実に乗り越え、「晩晴」に達した環境対策の先駆者

明治26年(1893年)、硫黄分を多く含む銅鉱石の製錬で生じるガスが原因で、別子の山々や新居浜近郊の田畑・山野が枯れるという大きな煙害が発生していました。加えて農民や労使の紛争という、内憂外患の別子銅山に存亡の危機が迫っていました。明治27年、48歳の伊庭貞剛は、母の弟で叔父の別子銅山支配人、広瀬幸平の要請で、問題解決のため支配人として単身で着任します。

別子全山、木のない荒れ果てた姿に大変心を痛め、「天地の道理に反する」として、ただちに山林復旧の壮大な植林事業、すなわち毎年百万本、多い年は二百万本を超えるという植林に着手しました。

別子全山を旧の^{もと}あおあおとした姿にして 之を自然にもどさなければならない

殺気立った暴動や争議を収めるにあたり、かごに乗らずよく歩き、ある時は新居浜にくんだり、採鉱夫や製錬夫の声によく耳を傾けました。こうして対話・会話を一年で収める一方、着任早々に新居浜製鉄所の閉鎖、「えんとつ山」の山根製錬所の閉鎖、山林課の再設置(住友林業株式会社の前身)や、煙害対策を根本的に解決すべしと、四阪島への製錬所の統合移転を推し進めたのでした。

五ヶ年の跡見返れば雪の山(伊庭貞剛) 月と花とは人に譲りて(返句:品川 彌二郎)

大正15年(1926年)没。享年80歳。近江八幡市の伊庭家墓所に眠る。禅修行の道にも通じた「徳」の人でした。

一部、末岡照啓氏(広瀬歴史記念館名誉館長)著「伊庭貞剛小伝」引用

伊庭貞剛を取り巻く人々

田向 重右衛門

住友吉岡銅山の支配人の時、切り上がり長兵衛から別子山の鉱脈の存在を聞き調査した。その結果、住友は江戸幕府に開抗出願する。

切り上がり 長兵衛

元禄3年、時の支配人田向重右衛門に別子銅山の鉱脈を見つけて進言した人。流れ鉱夫で、日本中の鉱山で鉱夫として働いていたらしい。

広瀬 幸平

伊庭の叔父で住友初代総理事。明治維新で官軍に接収された別子銅山の稼行権を新政府に認めさせ、一部重役の経営難を理由とした売却案に断固反対し、フランス人技師を招いて別子銅山の近代化を推進する。又、塩野門之助をフランスに留学させるなど、鉱山技師を養成、外国資本に頼らず、別子近代化を達成した。

塩野 門之助

フランスの鉱山技師ラロックの通訳として、住友に入社したが、後日、鉱山技術を学ぶ為、住友よりパリに留学。帰国後、別子銅山技師長となる。その後広瀬と意見が合わず、足尾銅山に行くが、伊庭の要請で再び別子銅山に戻り、伊庭と共に、亜硫酸ガスによる煙害をなくそうと奔走する。

大島 供清

住友の役員。広瀬と意見が合わず、退職。

田鶴子

伊庭の母、広瀬幸平の姉。

松

伊庭の最初の妻。体が弱く、娘はる子を残し、若くしてこの世を去る。

梅子

松の死後、伊庭のところに嫁いでくる。気丈な人で、はる子を含む10人の子と、母の田鶴子の世話をし、家庭を守る。

峩山和尚

臨済宗の僧。伊庭よりも年下ではあるが一番の相談相手で、特に尊敬した友人。

品川 彌二郎

伊庭の心友。明治の政治家。独協大学の前身、独逸学協会学校を開設。とんやれ節の作詞者。

小川 治兵衛

当時、日本最高の庭師と云われた人。